

キリスト教と社会思想

キリスト教もまた明治の思想に大きな影響を与えた。

明治の代表的なキリスト教徒には武士階級の出身者が多かったので、彼らは武士的な生き方とキリスト教とを結びつけようとした。その代表者が内村鑑三である。内村は「武士道に接木されたキリスト教」というものをめざした。彼は「不敬事件」を起こしたりもしたが、強い愛国心を持ち、自分が敬愛するものは「二つの J (Jesus と Japan)」(イエス・キリストと日本)であると述べている。

また、キリスト教の説く人類愛は、一方で社会主義を受け入れる素地ともなった。社会主義は政府の弾圧を受けながらも、その後さまざまに展開していく。

森鷗外と夏目漱石にみる近代

文学の世界においても、明治になると西洋的な自立した個人を描こうとする試みが起こった。しかし、それは日本においては多くの困難を伴うものであった。

森鷗外は、自己を確立させることの難しさを小説によって描いた。また自己を支える理想的なものが得られないことにも悩むようになり、神がいるかのようにふるまう「かのように」の哲学や、「諦念」の思想を説いた。

夏目漱石は、日本人が西洋文明ばかり追いかけていることを批判し、みずからの主体性をもたなければならないと主張した。しかし、そうした主体性というものは、人間の内側にひそむエゴイズムの問題ともつながっていることに気づき、それを小説の世界で見つめようとした。

Tanakaコラム

武士道

明治の思想家の多くは武士の出身でした。ですから、彼らは立場がそれぞれ異なっても、その精神の底には武士道的なものが流れていました。福沢諭吉もその一人です。幕府に仕えていた勝海舟や榎本武揚は、明治になると幕府を倒した新政府に仕えてしまいます。そのことを福沢は、武士の「瘦せ我慢」の精神に欠けているとして厳しく批判しています。西洋を模範とする文明開化を押し進めた福沢が、一方でそうした武士道を説いていたことは興味深いことです。